

討を続けてい
調査会は今月
税制改正大綱
方針を固め、
越した。
ット
40じゃない
直、今その数
いないんで：
サミットを前
ち出した「2
%減」という
否かを問う10
の質問に、麻
した。凶らず
策への関心の
好となった。
世界的金融危
相に限らず議
ある。しかし、
年までに排出
した「気候変
的拘束力を持
定めた世界初
議定書から離
ハマ次期大統
を「他に並ぶ
緊急課題」と
取引市場創設

スナニでは1
京都議定書の
向けた取り決
について交渉
OP14が開か
な削減目標数
指すコペンハ
15は来年末。
枠組みの大き
みると見られ
国が途上国で
減した分を、
して算入でき

の加速
の毒性評価
療の実現
工心臓など
の超早期
法の開発
型ワクチン
視鏡口ポッ

は痛みを和らげるなどの対症療法に限られて
いる。

高浜教授らは、免疫を担う胸腺が、自己免疫疾患を起こさないように、Tリンパ球を教育していることに着目。マウスを使った実験で、骨の中にある「RANKL(ランクル)」と呼ばれるたんぱく質が、胸腺の働きを活発化することを突き止めた。秋山講師らは、CD40というたんぱく質も胸腺の活性化に必要であることを見つけた。

自己免疫疾患の患者は国内で200人に1人。医療費は年間計約3000億円とされる。高浜教授は「実用化すれば、医療費抑制にもつながる」としている。研究成果は、米医学専門誌に掲載された。

自己免疫疾患抑制 たんぱく質を発見

関節リウマチなどの自己免疫疾患を抑える働きをする二つのたんぱく質を、徳島大の高浜洋介教授らのチームと東京大の秋山泰身講師らのチームが発見した。自己免疫疾患の根本的な治療法を確立する手がかりになるという。

自己免疫疾患は、ウイルスから体を守るTリンパ球などが、誤って自分の細胞を攻撃することで起こる。関節が硬くなり激しく痛む「関節リウマチ」や口や目が乾く「シェーグレン症候群」などが知られる。治療

徳島大チームなど

るクリーン開発メカニズム(CDM)について、現在は対象外の原子力発電や二酸化炭素地下貯留などを含めるかどうかを検討。日本政府が提唱する、産業分野別に排出削減が可能な量を積み上げる「セクター別アプローチ」についても議論する。環境NGO「気候ネットワーク」の川阪京子さんは「ポズナニでは次期枠組みに含めるべき論点がほぼ出そろそろだろう」と期待する。日本にとって来年も今年以上に、将来の地球の姿を決める大問題に取り組む姿勢が問われる。

球温暖化対策として日米欧が開発を進めるクリーンな水素を用いる燃料電池や、高性能の電気自動車用電池をテーマに、産学官の専門家が国際ルールづくりや日本がリードする先端技術、企業の事業戦略の現状を紹介する。無料。定員150人(先着順)。問い合わせは同研究所(029・862・6221)へ。

研究者と交流できる「コ
ンタイム」も設ける。
館。問い合わせは同研究
75・753・6411)へ。
術総合研究所セミナー
自動車用リチウム電池
」1月16日午後1時
大阪科学技術センター
下鉄本町駅下車)。地